

5. 保護者の「なぜ？」に寄り添い支援していく ～ リトルペガサスでの活動実践報告 ～

リトルペガサス

「入室時、お子さんの心配な所はありますか？」の問いかけに“言葉を話さない”“指示が通らない”に次いで“帽子を被らない”“手を繋げない”などの点があげられる。課題のある子どもたちのさまざまな行動を分析し、活動中での取り組みを、実践例も含め発表する。

代弁、褒める、集団、支援

1. はじめに

「帽子を被らない」「手を繋がない」「リュックを背負わない」等の子ども様は、保護者としては日常生活を送る上で大きな困り事となり、我が子が集団の中で生活を送る事を考えた時にも不安要素となる。対応方法が分からず、怒ってしまったり無理にしようとして逆効果となり、疲れてしまう保護者も多い。何故子ども達は苦手なのか？「帽子を被らない子」は、視界が遮られ、いつもと見え方が違う事が苦手であったり、感覚が過敏で帽子の締めつけや縫い目が気になるからなのか？「手を繋がない子」は、走る感覚刺激を強く好む、好きな方へ歩きたい等の理由からなのか？結論はでないが、日々保護者と子どもの理由に寄り添い、実際にやってみることで、子どもに変化がある。また、悩んでいた保護者にも変化がある。今回は保護者の「なぜ？」に寄り添い、子ども達の理由を考えると共に、日々の活動の中で変化していく親子を通して寄り添う事の大切さがみえてきた。「帽子を被らない子」への実践に焦点を当て、以下に報告する。

2. 実践報告

2-I. 年少男児 A 君（平成30年11月1日現在）

平成29年11月9日（2歳児）より母子クラスに週1日通室開始（地域の保育園に通園中）。母の主訴：『身に付ける物への抵抗が強い。特に帽子を被せようとする時、大声を出して泣き叫び、後ろへ反り返り危険。帽子は保育園でも被らないので、被れるようになってほしい。』

I 期（初回～平成30年1月）

帽子を被せようすると大泣きし、すぐに自分で取る。母はどうしていいのかわからず、手も出せない状況だった。まずは児なりの理由（感覚の過敏さがあり、帽子を被ると違和感や気持ち悪さがあるのではないかと）を母と話し、気持ちを代弁した。その上で、母と約束した数秒（3秒から始める）だけは帽子を被ることを目標にした。また、帽子は園で被っている水色帽子に統一した。

表1 帽子を被る取り組み1

児	数秒でも大泣きする。
母	児に視線を合わせ、「3秒被るよ」と伝えてから帽子を乗せ、児の手を握りながら3秒数える。
職員	母も不慣れのため一緒に取り組む。

上記の取り組みにより、10秒帽子を被っている。

II 期（平成30年2月～）

帽子を被る時に大泣きし、すぐにとろうとするが、母の所に走って行こうとしたり、抱っこサインがでるようになった。そこで、被ったら母に抱っこをしてもらったり、母の所まで歩いて行く事を目標にした。“帽子を被ったら〇〇してもらった！”と感ぜられるよう、一貫した声掛けや対応を意識した。また、公園に到着したら帽子を取る事にした。

表2 帽子を被る取り組み2

児	泣いて嫌がるが、帽子を被ったら抱っこしてもらったり、母の所に行ける事が分かると、被っている時間がある。
母	児が帽子を取ろうとする手を包み込むように抱っこをし、嫌な気持ちを代弁しつつ被る度褒める。児が歩いている時は数メートル先で「Aちゃん、上手だよ、こっちだよ」と声をかける。
職員	側で見守りつつ、母を励まし、児の事を一緒に褒める。児の後ろから手を握り帽子を取らないよう手伝いながら、母の方へ一緒に歩く。

帽子を被る事に抵抗は見られたが、一貫して対応する事で、帽子を被り母に抱っこをされたり、母の方に歩いていく時間が長くなっていった。母も接し方が少しずつ変わり、通っている保育園の先生が見学に来た事が自信になる様子もあった。

Ⅲ期（平成30年5月～）

5月、保育所等訪問支援にて園庭遊びの時間、同じ園に通っている兄の橙色の帽子を先生が児に渡すと、被る事があった。園で帽子を被ったのは2回目、1番長く被っていた。水色帽子は嫌な印象がついているので違う色の帽子を見て嬉しくなった、いつも帽子を被る練習をしている職員が園に来ていたから、被る経験を積んでいたから自然と被った、たまたま被った、など児なりの理由を母や職員と話し合った。リトルペガサスの活動時、元の水色帽子と橙帽子の二種類を用意すると、橙帽子を児が選んだため、園とリトルペガサスで橙帽子に統一した。帽子を被る時間を少しずつ伸ばし、母と手を繋いで歩く事、公園でも帽子を被る事を目標にした。

表3 帽子を被る取り組み3

児	まずは抵抗するが、最終的に被り、母と手を繋いで公園に行く。
母	「被ってから公園に行こうね」と児に声をかけ、被った時に褒めながら、楽しい雰囲気で見守りながら手を繋ぎ歩く。
職員	一貫して児に伝えられるよう、側で見守り、手伝う。

帽子を被るまでには時間がかかった。しかし、一貫して代弁し約束を児に伝える、できた時にし

っかり褒める事で、自分から被り、母と手を繋ぐ姿が増えていった。また、帽子を被る時間も、長くなった。母は以前よりも、児に伝えようとしており、児の気持ちを言葉にしたり、「Aちゃんすごいね」と褒める、うまくいかない時に「先生～！」と職員に手伝いをお願いするようになった。

平成30年11月1日現在、帽子への苦手さは残るが、児の様子に合わせたおとなの一貫した対応で、帽子を被り、笑顔で散歩に行っている。

※平成30年7月からは分離クラスも併用し、帽子を被るやりとりが週2回になった。母の接し方を継続してできるよう、母子クラスと分離クラスの職員間で連携を図った。

2-Ⅱ. 2歳児男児B君（平成30年11月1日現在）

登室当初は、リュックを背負う事がなく、母が児のリュックを持って来ていた。リュックを背負わせようとするると反り返って泣き叫んでいると母から話しもあったが、降室時も抵抗する姿が多く見られた。まず、リュックの種類を母と相談し、児の大きさに合った物や胸の辺りに留め具がある物を用意してもらった。背負う距離は、リトルペガサスの門から活動室までなど、職員と一緒に取り組める短い距離から進め、児が分かりやすいように一度決めた距離を背負えたらしっかり褒める。約束した時間以外は無理強いすることはしなかった。職員や母の真剣さが伝わり、児も約束した距離はしぶしぶだがリュックを背負うようになった。これを継続していくうちに徐々にではあるが、リュックを背負う時間が長くなり、今ではリュックを当たり前のように背負って登降室している。

3. まとめ

今回の実践報告を通し、二点大切な事が見えてきた。一点目は、保護者の「なぜ？」に寄り添い、子どもなりの理由を一緒に考えていく事である。子ども達は保護者に理解され褒めてもらう事で、確実に行動に変化があらわれる。現に本事例では、大きく抵抗し泣いていた姿から、少しずつ帽子を被り、笑顔に変わっていった。保護者は、理由を考え、気持ちを代弁し褒める、段階をつけて工夫する事で我が子にしっかりと伝わる事を実感していったのではないだろうか。

二点目は、集団を見据えて支援していく事である。子ども達はいずれ母と離れた集団に進んでいく。その集団の中では、帽子を被る、友だちと手を繋ぐ、リュックを背負うなど、自分ですべき事や、集団のルールとして行う事が多くある。母と一緒に過ごす事のできる大切な幼少期だからこそ、集団に行った時に必要な力を着実に身に付けていく事ができる。そしてその積み重ねが、就学後も子ども達が所属する環境の中で学ぶ姿に繋がっていくと考える。

子ども達の抱える理由は様々であり、保護者の「なぜ？」に対していつも明確な答えはない。しかし「どのように」という具体的な方法が見えてくる事で保護者に変化がうまれると考えられる。

おわりに

保護者が子育てに自信を持つ事で、子どもの行動に変化があらわれる。1つでも子どもが変わると、“私が取り組んだ”と保護者は自信に思う。そこに私たちは寄り添い、これからも子育ての応援団として支援していきたい。